

特別栽培米の品質傾向と対策

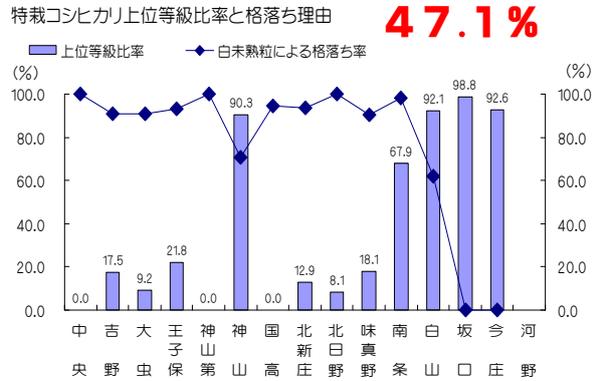
■ 平坦地と山間地の品質差が例年にも増して顕著 ■

平坦コシヒカリの収穫期は8月中旬
これができるなければ作付品種の転換を！

新潟県産でも品質の良い山間地では
特別栽培コシヒカリの作付拡大を！

◆ 品質

コシヒカリは適期田植えに取り組んでいるものの、近年は栄養成長期の気温が高く推移することから、早期(7月下旬~8月上旬)出穂の圃場が多くなっています。このことで、登熟前半(8月上旬~中旬)に極めて高温となり、白未熟粒が多発したため、倉前検査における特別栽培米コシヒカリの上位等級比率は47.1%(慣行栽培37.4%)となりました。慣行栽培と同じく、格落ち理由の大半(90.8%)は白未熟粒で、特に、平坦地では昼夜の気温較差がなく、白未熟粒の発生が著しい一方で、山間地では、夜温が下がり気温較差が大きくなったことで、白未熟粒は少なく、高い上位等級比率となりました。

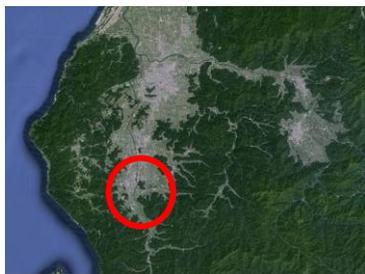


◆ 収量と食味

本年度の水稻の作況指数は、「やや良」の作柄が発表されましたが、コシヒカリは網下米が極めて多く、収量が低くなっている現況です。その要因として、8月下旬から9月上旬にかけて発生した大雨や台風18号の影響により、ほぼ全ての圃場において倒伏の被害が発生したことで、適正な水管理ができなくなり、養水分の補給が行われなくなったことが挙げられます。あわせて、稲体が窒素を消費できなかったことで、米のタンパク含有量が高くなり、食味も低くなりました。



◆ 地理的条件



J A 越前たけふ管内は吹き溜まり盆地になっており、平坦地の出穂~登熟期間中の平均気温は、風通しの良い坂井市や福井市と比べて0.3℃/日以上高くなっています。また、嶺南や嶺北の南部(J A 管内)は作土が浅いだけでなく、CEC(保肥力)が全般的に低く、地力に乏しいという二つの問題が根底にあります。これらの理由から、登熟期間が高温となる年には、背白、基白、乳白などの白未熟粒が発生し、外観質(整粒値)と食味を落としやすくなっています。

◆ 対策

- ・ 高温登熟の回避：適正出穂の早限は8月10日頃
- ・ ケイ酸質資材の継続施用：ケイカル500kg散布を
- ・ 作土深の確保：作土深は必ず15cm以上
- ・ 穂肥と食味のバランス：適正施肥量の遵守

~登熟期間中の活力低下を克服するために~



日本晴 復活プロジェクト

□ 平坦地では高温対策として日本晴の作付け拡大を □

◇ 今、何故日本晴なのか

現在、日本の稲作農業は大きな方向転換を求められています。環太平洋連携協定(TPP)農業交渉が進められる中、関税撤廃や削減の動きがあり、国際価格に比べ非常に高い価格の日本の米は、自由競争にさらされる恐れがあります。あわせて、食の欧米化や単純化が進み、米の消費は年々減ってきているのが現状です。

これらのことから、特別栽培コシヒカリのように価格が高くとも、生産者の個性が強く感じられ、より安全安心である米の販路開拓を進める一方で、これからの市場の需要に応じた、利益率の高い、確実に儲かる農業を目指していく必要があります。

そのため、JA越前たけふでは米づくりの生き残りをかけて、米の卸売業者や中食産業への直接販売を行っており、それらの実需者からは「日本晴」の引合要望が多くあるため、5年後の減反廃止を見越して中長期的に生産販売を強化する計画です。

平坦地の担い手農家を中心とした稲作農家の皆様には、品質・収入向上や作期分散の品種として26年産の作付をお願いするとともに、そのためのマーケティングと挑戦こそがJAの本来あるべき姿であると考えています。



◇ 品種特性



登熟期の日本晴

偏穂数型で強稈・耐倒伏性の多収品種。

葉色はやや淡く、葉幅が広く、やや垂れ気味の草型となる。過剰生育では有効茎歩合が低下し、一穂粒数の減少や登熟低下が目立ち、逆に少肥では穂数不足となり、多収は望めません。したがって初期の過剰生育を抑え、穂肥重点の多肥栽培を。

玄米はやや大きく、千粒重が23g程度で、光沢があり腹白、心白は比較的少なく、外観品質は良い。

いもち病にはやや強いが、紋枯病には中程度で根腐れに弱く、ごまはがれ病、穂枯れに弱い。ため、水管理、防除に留意しましょう。

元来、地力の高い土壤に適し、登熟期間が長いので、中山間地の日照の少ないところでは不向きとなります。また、近年は作付が極端に少なくなっているため、後期の用水の確保が問題になるので、計画的な集団栽培を図ってください。

日本晴の生育・収量の傾向

年次	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	収量 (kg/10a)	千粒重 (g)
平成15	8. 10	9. 24	84	20.5	398	625	23.4
16	8. 10	9. 21	74	20.3	370	550	22.8
17	8. 5	9. 16	81	19.4	349	511	23.8
18	8. 7	9. 25	80	20.8	385	625	23.9
19	8. 13	9. 26	74	21.3	357	640	24.2
平均	8. 9	9. 23	79	20.5	372	590	23.6

※ 8月中旬出穂 9月下旬成熟の作型が善

収量は10年前後を目標に白未熟粒1%以下の品質低下を回避する作型で！

高温登熟が恒常化している平坦地では日本晴の作付で品質と収入の向上を！